

県の現地採卵の取り組みについて

農林総合技術センター畜産技術部

○長尾裕美子・齋藤陽之・中谷幸穂

本県の肉用牛改良を推進するため、当部では飼養する高能力の黒毛和種雌牛から体内受精胚を採取し畜産農家に供給してきた。また、H21年からは、農家の優良な雌牛を活用した現地採卵を開始しており、その件数は年々増加するなど、農家ニーズも高まってきている。今後の効率的な実施に向け、これまでの採卵成績のとりまとめを行ったので報告する。

1 年間実施件数の推移

実施頭数はH31年頃から増加し、R6年は53頭実施した。また、利用農家はH21年1戸からR6年は24戸（16年間で延べ47戸）へ増加した。

2 採胚成績

H21年からR6年までの延べ230頭の採卵成績について統計処理を行い分析した。ドナーの平均月齢は73.5カ月齢、回収胚数17.5個、正常胚数11.9個、正常胚率（正常胚/回収胚）68%であった。総供給数は新鮮436個、凍結2,088個であった。

1) 季節による影響

R4～6年（n=114）を夏季（7～10月）と他の月で比較したところ、R6年のみ正常胚数、正常胚率、Aランク胚率が夏季で有意に低かった（ $P<0.05$ ）。

2) ドナーの年齢

正常胚数、正常胚率、Aランク胚率ともに8歳未満（13.2個、71.6%、52.0%）と比較し8歳以上で有意に低かった（9.2個、56.4%、36.4%）（ $P<0.01$ ）。

3) 過排卵処理方法

卵胞刺激ホルモン(FSH)製剤の20AU漸減法(3日間、朝夕1回投与)、30AUOneshot法による回収胚数はそれぞれ17.1、19.3個、正常胚数は11.8、12.3個と両区に有意差は認められなかった。

4) 採卵間隔

分娩を挟んだ場合、回収胚数、正常胚数、正常胚率の低下はなかった。一方、連続採卵では連続するたび低下がみられた。しかしこのうち2カ月以上の間隔をあけて実施した2回目の場合は、正常胚数、正常胚率の低下はみられなかった。

3 移植成績

報告があった移植成績（R1～5年、559卵）から、受胎率はレシピエント別で黒毛では新鮮46%、凍結37%、乳牛では新鮮33%、凍結41%であった。

以上の成績を、より効率的な胚生産につなげるため、ドナー選定やホルモン処理方法の選択、夏季の実施の検討などの判断材料として活用していきたい。